

良寛さんの歌、自選歌集・布留散東（ふるさと）を読み解く

佐々木 隆*

Interpretation on Hirusato an author's anthology
of poems selected by Ryoukan

Takashi SASAKI*

Key words : 和歌 Japanese poem

漢詩の形式 (起承転結) Chinese quatrain

修行 Zen training

救済 salvation

はじめに

良寛さん（江戸時代）は、一休さん（室町時代）と共によく知られたお坊さんです。良寛さんは優れた詩、歌、書として子どもと遊んだ逸話などで有名です。江戸時代の後期の宝暦4年（1754）から天保2年（1831）まで生きた越後（新潟県）の人です。15歳（明和6年・1769）の頃、優れた学者であった大森子陽（おおもりしろう）の塾へ通い、漢籍や作詩を学びました。

橘屋という名主（村長）の長男として家を継ぐはずでしたが、21歳（安永4年・1775）の時に理由不明の家出をします。橘屋は二男の泰儀（やすよし）が継ぎましたが、経営が上手くなく村の人々と争い、後に名主の資格を失い、橘屋は没落しました。

家出をした良寛さんは、お坊さんになり、国仙和尚の下で、22歳から備中（岡山県）玉島の曹洞宗の円通寺で修行し、寛政2年（1790）36歳で悟ったことを示す印可（いんか）の偈（げ）を受け、諸国を行脚（あんぎゃ）しました。

江戸時代の仏教は明から来日した隠元豆でも知られている隠元禅師（1592—1673・臨済宗（黄檗宗・おうぼくしゅう））の影響を受けます。仏の教えを説いたり仏を祭る法会の後に出される普茶（ふちや）から煎茶道が生まれました。黄檗宗は臨済宗の流れをくむ禅宗なのですが、中国の浄土宗や密教の影響を受けています。禅は黙って座禅をしますが、念仏もする禅として知られ、念仏をする浄土真宗のさかんな越後に育った良寛さんには親近感があったと思われる。密教との縁もあり、45歳の寛政9年（1797）に戻り郷本（こうもと・長岡市）の庵に住み、密教の一派である真言宗の照明寺の密蔵院に仮住まいするのも偶然や地縁だけではないでしょう。それから国上山（くがみやま）にある真言宗・国上寺（こくじょうじ）の住職の隠居所だった五合庵（ごごうあん）を借り、50歳の文化元年（1804）から住みました。

*東北女子大学

良寛さんは、生涯、実家に戻らず、お寺の住職にもならず、お檀家もありません。曹洞宗の開祖・道元禪師に倣い沙門(しゃもん・求道者)として、家々で食べ物乞う托鉢をし、いつも仮暮らしの一所不住(いつしよふじゅう)を旨としていました。良寛さんは「僧にあらず、俗にあらず」と言われた親鸞上人にも共感していたように思われます。文化9年(1812)、58歳の頃、詩集「草堂集貫華・そどうしゅうかんげ」と歌集「布留散東(ふるさと)」を編集します。これは自らの晩年を感じた良寛さんがこれまでの生涯を省みて、誰かのためと言うよりは自分自身のために作ったものではないかと思われま

す。文政10年(1827)に貞心尼さん(1798—1872)と良寛さんは出会い、貞心尼さんはすぐに弟子になります。天保2年(1831)、良寛さんは78歳で亡くなりました¹。4年後、貞心尼さんによって天保6年(1835)に『蓮(はちす)の露』という良寛さんと貞心尼さんの師弟の唱和が歌として相聞(恋愛)のように高められた信仰を語る歌集ができました。

以下、紹介する良寛さんの歌は歌集「布留散東・ふるさと」の配列は、無造作に並べたものではなく、時間的な順序に並べられただけのものでもありません。以下その構成が分かるように抜粋しました。故郷から出て修行の旅が始まり、そこから心の深まり、再び故郷へ戻り俗へも戻り、人々と交わり、さらに、子どもとの遊びの中で融通無碍な悟りの境地に達した所までお話しいたします。ⁱ

1番 近江路(あふみみち)をすぎて

ふるさとへ行く人あらば言(こと)つてむ けふ近江路を我越えにきと
 訳 故郷へ行く人があれば、私は近江路をこえて先へ行ったと伝えて

¹年代は、田中圭一氏の年譜に従いました。通説より4年早く生まれたことになっています。

欲しい

解説

歌の説明となる詞書(ことばがき)の「近江路をすぎて」は、歌の主題を示し、状況を説明するものです。この詞書は、状況の説明よりも、近江路というものへの思いという主題を示すものです。その思いとは、良寛さんの慕った西行(歌人・真言宗の僧侶1118—1190)に「近江路や野路(のじ)の旅人いそがなむ野洲河原(やすがはら)とて遠からぬかは」(旅人はなぜ近江路の野路を急ぐのだろうか。ひとやすみできる野洲河原がもうすぐだからだろうか)の歌があり、西行法師が、武士の身分を捨て、家族を捨て、出家し、求道者として歩いた近江路を、今私も家を捨てて同じように求道の旅をしているという感動です。「言つてむ」と「いそがなむ」の「む」にも共通するものがあります。

後拾遺集20の源兼澄²の「古里(ふるさと)へ行く人あらばことづてむ けふ(今日) 鶯の初音ききつと」(故郷へ行く人に春の到来と鶯の初音を聞いて感動している私のことを伝えてほしい)、拾遺集339の平兼盛の「たよりあらばいかで都へ告げやらむ 今日白河の関は越えぬと」(都へ便りすることができぬものならば、私が今日、白河の関を越えたと伝えたい)などが元になった歌でしょう。春の早い訪れを故郷への思いとして伝えたい源兼澄のように、また都から離れたことが決定的なものとなった白河の関を越える感動を平兼盛のように、良寛さんも近江路を越えて未知の土地へ向かう心と遠く離れた故郷を思う過去へ向かう心を表現しています。この歌によって今ここに到達した自分をより深く見つめ、心の中に詰まった言葉にならない矛盾する感情を解放したのです。

² 詞書に「正月二日に逢坂にて鶯の声を聞きてより待いける」とある。この歌を良寛が強く意識しているならば、季節は一年の始まりの春で、季節の点でも最初に配列されることにならわしい。

近江路をすぎて、岡山県の玉島（現在・倉敷市）の円通寺へ、故郷から離れ、さらに未知の世界へ行くのです。「ふるさと」は「布留散東・ふるさと」と、近江路は「安布美知・あふみち」と万葉仮名で書かれ、「あふ」は、逢う・会う・合うなどの言葉に当てられ、人との出合いの意味が込められています。「あふみ」の「み」は身、自分のことも意味します。身内の人や知人そして故郷の人と出会うこと、そのような縁故のある人との関係から今日すっかり離れるところまでやってきた。西行の旅への熱い思いと旅の解放感だけでなく、家出をしたとはいえ故郷への寂寥感と懐かしい思いがあります。「行く人あらば」という仮定は、そこには誰も人はいないので。そうすると「行く人」の人とは、万が一にも、この歌集を読んでくれる人、私たちへの呼びかけなのです。自分の心を、歌を読んでくれるあなたへ伝えたいという。この歌はその思いを現わす歌集の序となり、題名にもなっています。ⁱⁱ

4番 高野（たかの）のみ寺に宿りて

津（つ）の国の高野の奥の古寺（ふるてら）に 杉のしづくを聞きあかしつつ

訳 高野の奥の古寺で杉の梢から落ちてくるしづくの音を聞いて夜を明かしました。

解説

新古今集625の西行の歌に「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり」（撰津の国の難波の春の景色は夢だったのだろうか。今見る景色は枯れた蘆の葉がゆらさばかり）があります。津の国の地名と西行への思い、さらに高野の名前から「紀の国」の高野へと風景の連想が広がります。真言宗の高野山金剛峯寺に縁のある西行が思い浮かび、一つの歌によって二つの土地が結び付けられます。歌集の配列から、玉島の円通寺での修行を終え、故郷へ戻る途中にいる歌として配置されています。

歌の構成は、撰津の国という国の大きな枠組みから、高野の奥へと移り、由緒のある古寺の中にいて目覚めている自分へ、そして、その自分が耳を傾けている雫というさらに小さなものの音へと意識の焦点が絞られて行きます。古寺は荒れた粗末な寺ではありません。

夜を明かしたのは、雫の音を聴いていたからです。それは雨ではなく、杉の葉の先から滴り落ちる雫の小さな小さな音です。それで山奥の静けさが分かります。沈黙よりもさらに静かな音が聞こえてきたのです。静けさの中にさまざま雫のしたたる音がして、それが音楽のようになったのでしょうか。雫の落ちるのは春か夏の季節と考えられます。

雫の音が、一音、一音、一刹那という存在の瞬間そして昔から絶え間なく続いてきた祈りの敬虔な言葉（密教で言う真言）のように感じられたと思われれます。しかし、杉（すぎ・数起）は「過ぎ」に通じますので、夢だったのかとさえ思われる過ぎにし日々への思い出に涙の雫を流したかもしれません。ⁱⁱⁱ

5番 黒坂山（くろさかやま）のふもとに宿りて

あしひきの黒坂山の木の間より 洩（も）りくる月の影（かげ）のさやけさ

訳 黒坂山の木々の間からもれてくる月の光はなんと清らかなことか。

解説

黒坂山は新潟県長岡市和島にある山と思われれます。「宿りて」とあるので、長岡市和島の小黒家に宿を借りたと思われれます。長岡市和島は、故郷の出雲崎よりも北に位置し、旅の続きならば実家をすでに通り過ぎていることとなります。

「あしひきの・阿之悲幾能」は山に掛る枕詞で、「足引きの」とも書かれ、山を歩いたり山に登ったりすると足を引きずるところから来た言葉です。故郷まで、ようやく足を引きずって戻ってきたという気持

ちが感じられます。しかし、自分自身のこと、実家のことなどに葛藤があつて、故郷にそのまま入らず周囲で足踏みをしているようです。そこへ月の光が旅と心の疲れを癒すかのように照らしたので、心に澄んだ明るさが生まれたように思われます。

この歌は、古今集184秋の「木の間に洩りくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり」と新古今集413秋の「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月のかげのさやけさ」を本歌としています。「心づくし」は真心を込めて何かをすることではなく、さまざまなこと心労することです。美的なものが内面化され、心の闇、黒坂山の黒から闇の暗さが強調されている所へ月の光が差し込むのです。歌集では、2番目の歌から5番目のこの歌まで夜の歌（闇）が続き、その闇へとさしてくる月の光が「心づくし」の優しさとして慰め、「さやけさ」（清けさ）として闇を浄化するという素晴らしい構成になっています。^{iv}

8番

いにしへを思へば夢かうつつかも 夜は時雨（しぐれ）の雨を聞きつつ
 訳 昔のことを思うと、故郷のことは現実だったのか、それともみんな夢だったのか、夜の時雨の雨の音を聞きながらそんなことが思われ
 てくる。

解説

久しぶりに戻った良寛さんはすっかり昔と違って荒れてしまった「わが故郷」を見て、再び夜（闇）に、時雨の音を聞きつつ昔のことを思い出すという構成になっています。「いにしへ」とは今は存在しない心の中にある故郷のように思われます。「夜は」とは、昼に見た物に對比して、夜は降ったり止んだりする初冬に降る時雨の音を聞き、見えないものを通じて昔を思ったということです。「聞きつつ」の「つつ」は継続・反復の意味で、時雨が繰り返り降り降って来るその雨音の繰り返すように、思うことが、問いとなり、答えとなり、また問いになって行くのです。

雨が降ったり止んだりするようにイメージが浮かび上がりまた沈んで、さまざまな思い出は波が寄せては返すように心の中を去来しています。楽しかったこと、悲しかったこと、良かったことも、悪かったことも回想しているのです。それら対象となったもの、その原因となったものも、今はもうなくなつて、思い出だけが残っています。今あることが夢で、昔あったことが現実だったのでしようか、それともすべてが夢だったのでしようか。^v 4番の暖かい季節の雫の音とは異なるものがあります。

夜、目覚めて、夢を見ていたのか、それとも目覚めている夢を見ているのだろうか、迷いなのか悟りなのか、夢も現実も、迷いも悟りも区別なく、時とともに、雨が流れて行くように、すべては流れ去つてしまふのだろうか、自分の生涯とは何か、生きていることは何か、何のために生まれてきたのか、禅の公案（課題）にある父母さえ生まれる前の自分とは何か（父母未生以前、本来の面目という問いかけのようなものを）、夜の闇の中で一人思っているようです。³

13番

賤（しづ）が家（や）の垣根に春の立ちしより 若菜（わか菜）摘ま
 むとしめぬ日（ひ）はなし

訳 粗末な家の垣根に立春の徴となる草の芽を見てから、若菜を摘もうと心に深く思わない日はありません。

解説

時がたち、冬が終わり、ようやく春がやってきました。良寛さんの心にも春がやってきたのです。歌集の配列は自己の内面に沈潜したところから、外の人々へと心が開かれて行きます。賤が家とは特別な身

³ よく知られている詩「生涯身を立つるに懶（ものう）く…夜雨、草庵の裡（うち）」で聞いていたのは時雨の雨だったのかもしれない。筆者には春雨のようにも思われます。色々な季節を考えることで、詩情が変わります。

分や財産を持たない普通の人々の家のことや自分の家のことを謙遜して言います。ここは良寛さんの五合庵のことと思われませんが、賤が家と言って「わが庵」と言いません。「わが庵」ならば、侘びて暮らす良寛さん一人の侘びた暮らしと春とのかかわりに限定されますが、賤が家ならば、同じように賤が家に住む若菜を摘もうとしている「ふるさと」の人々（衆生）の心と広く通じあうことになります。観音菩薩の「観音」とは、人々の心の中の喜び悲しみの声（音）を見るがごとく耳を傾け聞き、喜びの心も悲しみの心も感じるのです、良寛さんも人々と春の喜びを人々と共にすることによって孤独から解放されたのです。それは自利と利他を兼ね備えた悟りへの菩薩行なのです。

地面から若菜が芽吹き、賤が家の垣根にも春が始まりました。垣根とは家の囲いのことだけではなく、家のそばの植物も指します。西行の「心せむ賤が垣根の梅はあなや よしなくすぐる 人どどめけり」（私の家の垣根のそばに梅の花が咲いている。そんな人の訪れないところへも、花を見るために立ち寄ってくれるだろう）（山家集上51）と、賤が家（我が家）の垣根に春の梅の花を認めて、侘しさを慰めてくれる人への理解を共にします。

「賤が家の垣根に春の立ちしより」には、雪国の長い冬の寒々とした風景と春の暖かな風景との対比があります。雪が解け始め、白い雪の間に黒い土がだんだん見えてくるだけでも喜びとなるのです。暦の上で「春の立つ」とは立春のことであり、新年の始めで、まだ寒く雪が降ることもあります。

万葉集1427「明日よりは若菜つまむと標（し）めし野に、昨日も今日も雪は降りつつ」（明日から若菜をつもうと標（しるし）した野に、昨日も今日も雪は降り続けている）では、雪が降っています。この「標（し）めし野」の「しめ」には「標（し）め」と「染（し）め」（心に深く思い込む）とが掛けられて、外の風景が内面化されています。心にかかる意味で「しめぬ日はなし」となるのです。しかし、「垣根に春の立ちし」と、ここでは暦の上だけではなく実際に暖かい春が

始まっています。春になって、人々は宮中の神事から広まったと言われる若菜摘みという雅な行事を楽しみに、浮き浮きと喜びに心をときめかせない日はないのです。^{vi}

15番

この園（その）の 柳（やなぎ）のもとに 円居（まろい）して 遊ぶ春日（はるひ）は 樂しきをつめ

訳 この園の柳の木の下に、皆が輪になって集い、春の日の遊びとして、楽しく歌ったり踊ったりしている。

解説

「この園」は、家や屋敷などの庭ではなく、野原か田畑のことでしょう。岩波古語辞典によれば、園とは「果樹・野菜などを植える庭園」とあります。ここでは、田畑のことを雅に園と表現したのです。人々は若菜を摘み終わり、さらにくつろぎ和み遊びます。散歩をしたり歌ったり踊ったと思われます。「柳」は、万葉集825「梅の花咲きたる苑の青柳をかづらにしつつ遊び暮らさな」（白い梅の花の咲いた園の青柳を髪飾りにして遊び暮らそうよ）とあり、青い芽を吹いてきた春の柳です。柳の木は再生力が強く、枝を挿すと根が付き再生します。冬枯れで死んでいたような世界が春となって復活したことを柳の芽吹きは象徴しているのです。「柳のもとに円居（まろい）して遊ぶ」と「遊ぶ」から、一つの家族だけではなく周辺の老若男女まで集まっていることが分かります。それは楽しい宴であり、柳の下で春を迎えた喜び言祝（ことほ）ぎ、命の延びたことへ神仏への感謝そして豊かな実りを願う宗教的な儀礼だったのでしょう。

樂しき「をづめ・小集樂」（楽しい歌舞の集い）について、万葉集3808「住吉（すみのえ）のをづめに出でて まさかにも 己妻（おのづま）すらを 鏡と見つも」（住吉（すみのえ）のをづめ（小集樂）に参加したら、自分の妻がとりわけ美しかったので、思わず鏡を見るように妻を見つめてしまった）とあります。万葉集を読んでいた良寛

さんはたぶんこの歌のなごやかな心を読み取って「をづめ」の言葉を引用してきたように思われます。この歌は、まるでおどけて見せる寸劇のような祝祭的喜劇となっています。この夫婦はこの「をづめ」で出会って結ばれたのかもしれない。

この円居にも、男女が歌によって求婚をしあう歌垣（うたがき）のような祭儀と遊びの要素も含まれていたと思われる。柳の木の下でも土地の神あるいは春の神を祭って同じようなことが行われたのかもしれない。ここで歌の配列は話題が前の女性を中心とした若菜摘みの楽しみから男性を含む家族の遊びへと変わってきます。^{vii}

16番

梅の花折りてかざして いそのかみ 古（ふ）りにしことを しぬび
つるかも

訳 ふと梅の花を折って髪に飾ったら、香りから懐かしい昔が偲ばれました。

解説

本歌は万葉集843「梅の花 折りてかざしつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思う」（梅の花を折って髪にかざし、人々の遊ぶ姿を見ると、都がしのばれる）でしょう。この「諸人の遊ぶ」と前の15番の「円居して遊ぶ」が通じ、15番の「この園の柳のもとに」の「柳」と16番の「梅の花折りてかざして」の「梅」が春を象徴する対にもなっています。背後にある本歌を意識して配列しているように思われます。

別の稿には詞書があり「如月の十日ばかりに、一人二人伴ひて真木山に遊び（た）りける、有則（ありのり）がものとの家は跡かたもなくて梅の花の盛りになむありければ詠める」とあります⁴。有則とは真木山（新潟県燕市）の原田鶴斎（じゃくさい）のことで大森子陽の塾

の友です。だから、その「一人二人」は大人の男性のことになります。人が移り、家も跡形もなくなったのに、花だけは昔と同じように咲いていることから、劉廷芝の『白頭を悲しむ翁に代わりて』にある「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」という時の移ろいと時の無情を悲しむ詩が思い出されます。しかし、ここでは原田鶴斎との思い出の歌として限定する詞書を除いて、前の15番の対としたと思われる。それは良寛さんがこの歌集を編集する際に万葉集の編集を思い浮かべて並べ、性別を超え、個人の思い出を超えた内容にしようとしたからだと思われる。

「いそのかみ」（石の上）は「ふる」（旧る・降る）に掛る枕詞で、新古今集88・春「いそのかみ古き都に来て見れば昔かざしし花咲きにけり」（古き都に来て見ると昔髪に挿した花が今も咲いていた）とあります。花などを髪に飾るのは、片桐洋一氏によれば、その生命力にあやかっつて不老長寿を寿（ことほ）ぐためと言われます。梅の花は花の美しさよりもその香りを重んじたので、髪にかざせば当然、香りが漂ってきます。この歌も「昔かざしし」が昔（奈良・平安時代）の人がかざしたという意味と、私が昔（若い頃）かざしたという意味の両方に掛けられているようです。

良寛さんの歌も「いそのかみ 古（ふ）りにしことをしぬびつるかも」の「古りにしこと」とは、万葉集に描かれた春の情景により近づけ、奈良の都の春の楽しみに心も近づくようにしたのです。

若菜摘みに外へ出かけ、田園で柳の木の下に円居して歌ったり踊ったりしたこと、梅の花を髪に飾ったその香りから、古代のことがしのばれ、昔の若い頃のこととも思い出されます。そして、子どもの頃のことも蘇ってきて、次の歌への前提となります。一連の大人の春の遊びの風景がここで終わります。^{viii}

17番（始まり）

霞立つ永き春日（はるひ）に 子どもらと 手まりつきつつ この日

暮らしつ

訳 霞の立つ長くたった春の日に、子どもたちと手まりについて、この日は一日中過ごしました。

解説

前の大人の歌が春という舞台を設定して終わり、子どもの歌がその春の舞台の上で始まります。ここから始まる子どもの歌の配列にもまとまりがあります。これも漢詩の起承転結の構成が利用してまともであると思われれます。この歌は「起」即ち「始まり」の歌となります。

「霞立つ」は春の枕詞です。霞は春になり遠くの山がかすんで見える様子を現わしています。「永き・ながき」は、日の短かった冬が終わわり、日の長くなつた春を表す言葉です。ゆつくりとした時間の流れるのかな春の風景と気分が感じられます。「霞立つ永き春日」は、万葉集846「霞立つ永き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも」（霞立つ永き春の日、髪に梅の花を飾つたら、とてもなつかしい香りがしました）が本歌だと思われれます。この「いやなつかしき」は16番の「梅の花折りてかざしていそのかみ古（ふ）りにしことをしぬびつるかも」の「しぬびつるかも」とほぼ同じ意味です。その本歌、万葉集843では梅の花を髪にかざして遊んだ遠い都のことを思い出しています。万葉集846の「なつかしき梅の花かも」とは末尾の「かも」まで共通しています。この部分では歌集『ふるさと』と万葉集の配列とがかわります。前の歌からこの歌への移行は万葉集の編集を意識しているものと思わざるをえません。万葉集という古代的なものを意識させるのはただ昔の古いと言うだけのことではなく、時間的な変化するものを超えた根源的なものを良寛さんが感じているからです。それを前の大人の歌そして子どもの歌という構成において示そうとしているようです。

春ののどかな野遊びの中で昔（古りにしこと）を思うことが家族や故郷などの過去へとさかのぼり、さらに、一人一人の子どもの頃そし

て人間の本来の在り方までさかのぼります。世間の計らいから離れた遊びには人間の根源にある童心とかかわるものがあるからです。

「手まりつきつ」から、時はリズムミカルな手まりの音で刻まれ、手まり唄も聞こえてきます。これは『梁塵秘抄』の「遊びせんとやうまれけむ、戯れせんとや生まれけむ、遊ぶ子どもの声聞けば、我が身さえこそ揺るがるれ」（遊びをするために生まれたのだろうか、戯れをするために生まれたのだろうか、遊んでいる子どもの生き生きとした声を聞くと、（大人の）私さえも、喜びに揺れ動くようだ）という歌に通じるものです。

「子どもら」との「と」という並立助詞が加わることで、心が弾んで揺れ動き出し、良寛さんと子どもの間にある大人と子どもの心の境が解けて、子どもと一緒に、さらに良寛さんと我々の間にある境もなくなつてゆくのです。

「この日暮らしつ」の「つ」は完了であり、この日への集中は、禅における而今（にこん）という過去や未来への思い煩いから離れ、ただ今ここに生きることに通じます。わずらいやこわばりから解放され、手まりと子どもらが一つになった遊戯三昧（子どもが遊ぶようにこだわりの無い自由で自在な）の境地です。^{ix}

これは道元禅師の『正法眼蔵』にある修行者の行うべき課題である「菩提薩埵四摂法・ぼだいさつたしうほう」（布施・愛語・利行・同事）という菩薩行のなかの「同事」に当たります。同事行とは上から施したり世話をしたりするのではなく、相手と同じ立場に立ち、寄り添い、喜び悲しみに共感することの実践です。喜びと楽しみそして悲しみを子どもと共にすることです。ただの趣味や暇つぶしで遊んでいるわけではありません。これまでに誰もしなかった子どもへの同事行を行っているのです。これは宗教的にも画期的なことで、キリスト教にも聖書に「心をいれかえて幼子の如くでなければ天国へ行くことはできない」（マタイ・18章3節）とありますがなかなか実行できなかったことです。

良寛さんはカトリックの聖フランシスコ（1181—1226）と比べられることがあります。フランシスコは魚や小鳥にさえ説教をしたと言われても、子どもと遊んだと言う話はありません。カトリックでは、近代になって子どもというものを認めました。映画になったテレーズ（幼きイエスのテレジア）（1873—97）という女性の生き方の影響です。彼女は大きな偉大な仕事ではなく小さな自分でも出来ることを謙虚に素直に行った人です。この人の影響でその当時の厳格なカトリックの世界に繊細な優しさを導き入れることになりました。⁵

18番（展開）

この里に 手まりつきつつ 子どもらと 遊ぶ春日は 暮れずともよし
 訳 この里で子どもたちと手まりをついて遊ぶ、春の日よ、くれない
 でおくれ。

解説

前の歌と「手まりつきつつ」と「子どもらと」そして「春日」の言葉が共通します。前の歌を受けて展開するので漢詩の構成では「承」に当たります。

「この里に」の「に」は方向を示す助詞で、手まりをついている場所だけでなく、良寛さんが山から里に下りてきていることも示しています。「この里に」という場所の設定は前の歌の「この日」という時間の設定に対応します。子どもらと遊び、糸糸で作られた美しい手まりが光り始め、子どもと手まりが眩しいほどに輝き出します。この時間とこの場所という限定の対は、良寛さんと子どもたちとの一期一会のかけがえのない出会いなのです。

⁵ このテレーズに影響を受けて名前を付けたのがマザー・テレサです。ちなみに、テレーズもテレジアもテレサも同じ名前です。その名前はさらに、昔スペインにテレジアという神秘家にちなみます。

それが可能になったのは前述の「菩提薩埵四摂法」（布施・愛語・利行・同事）という菩薩行を実践していたからです。その中でも、「愛語」については楷書で書かれた良寛さんの臨書が残っています。道元禪師は『正法眼蔵随問記』で歌舞音曲などの遊びごとにつつを抜かしてはいけなさと戒めています。しかし、その教えに忠実であった良寛さんが歌や詩を詠みそれを書に表わし、子どもたちと遊んだ理由が、「菩提薩埵四摂法」から分かれます。「愛語」における心のこもった優しい言葉を書くことの実践として歌や詩を詠んだのです。西行ならば歌は真言を唱えることでした。

「この里に」は「ふるさととは荒れにけり」（7番・省略）と詠まれた場所も含まれていたはずですが、それが今ここではいつも春であるような老荘思想的には桃源郷（とうげんきょう）、仏教的に言えば極楽浄土のイメージに変わったのです。

「遊ぶ春日」は、「手まりつきつつ子どもらと遊ぶ」と「遊ぶ春日は暮れずともよし」と両方にかかわります。前の「子どもらと手まりつきつつ遊ぶ」の部分は、子どもたちと一体になって我を忘れ、時の立つのも忘れて遊んでいた忘我の体験です。それは忘年の本来の意味である自分の歳を忘れることです。子どもとなることで、すべての人の子どもだった時代の共通感覚が甦ってきます。良寛さんだけの特別な経験ではありません。後の部分はそれを振り返って遊べるような春の日がいつまでも続いて欲しいと願うのです。永き春日にも、子どもたちが家に帰らなければならぬ夕暮れが迫ってきます。これも我々に共通する記憶であり感覚です。

「暮れずともよし」の「とも」は、「暮れる」の否定の「暮れず」を強調して、暮れない方が良いというのです。しかし、「とも」には放任や推量そして意志の意味もあります。暮れそうでも暮れない春の夕暮れ曖昧な雰囲気が表示され、「遊ぶ春日」への暮れても、暮れなくても良いという執着のない放下の態度です。良寛さんと子どもたちとのかけがえのない至福の時です。^xだから、この日が終わっても、この里

での出来事は永遠に忘れられないものとなるのです。最後の「よし」には絶対的な肯定の意味が込められていることとなります。

19番（転換）

この宮のもりの木下（こした）に 子どもらと 遊ぶ春日に なりにけらしも

訳 この神社の境内の木の下で子どもたちと遊ぶ春となったのだなあ。

解説

「この宮のもり」の「もり」には「森」という字を当てることができますが、原文は「毛里・もり」と書いているので、「社」ともすることもできるのです。「もりの木」と結びつけば森となり、「宮のもり」と結びつけば社となります。当てる文字によって状況やイメージが微妙に違ってきます。岩波古語辞典によれば、「もり」「社・森」「樹木の茂った、神社など神聖な霊域。神の降りてくるところ」とあり、森ならば、常緑樹などの木が生え、少し暗く、少し寒い感じがします。社ならば神社の境内の木の下で子どもが遊ぶ姿や声をして我々にどこかで見えた懐かしい風景を思い出させます。

18番は別な稿には地藏堂と歌の説明となる詞書にあり、そこはただの遊び場ではなくお地藏さまが子どもを見守っている場所であることを示しています。次に「この宮」とあり、「宮」は神さまの住む場所として、神さまがそこにいらつしやることを示しています。つまり、無心に遊ぶ子どもが神や仏の存在に近いことを良寛さんは認めているのです。明治に神仏分離令が出るまでは、神仏習合が一般的な信仰の形態だったので、良寛さんは仏さまも神さまも子どもたちを同じように見守っていると信じていたのでしょう。

「この」という言葉に注目すると、17番の「この日暮らしつ」の「つ」はこの一日を把握し、この一日を生き切ったのです。18番の「この里に手まりつきつつ」の「つつ」は生き生きとした手まりとのかかわ

りが捉えられています。19番の「この宮のもりの木下（こした）に」の「こしたに」は樹下石上（じゅかせきじょう）の言葉を連想させます。これは行脚し修行する意味で、遊行する良寛さんの生き方です。19番の「子どもらと遊ぶ春日」は18番の歌と同じですが、17番と18番の「手まりつきつつ」という言葉がなくなり、手まりから遊びに言葉が代わっています。遊びは人の欲や怒りや憎しみを忘れさせ、楽しんで無心になるならば、それは神と遊び忘我の状態、仏と共に涅槃（ねはん）の境地にあると言えるものではないでしょうか。

「子どもらと遊ぶ」と「春日」が結び付けば、「子どもらと遊ぶ春日」となり、「子どもらと遊ぶ」と「春日」が一つのものになります。さらに「春日」は「春」と「日」が一つになったものだから、日は光であり春です。遊ぶことの中で子どもたちは光となり、澄んだ笑い声は春のような暖かさへ変わり、そこはしばらくの間、日溜まりのような極楽浄土となるのです。^{xi}

20（結論）

ひさかたの 天（あま）ぎる雪と 見るまでに 降るは桜の花にぞありける

訳 空一面に曇ったように雪が舞ってきたのかと見えるほどに、舞い散ってくるのは桜の花なのだなあ。

解説

前の「遊ぶ春日になりけらしも」と春になったことを喜んでいると、一瞬、雪かと思わせる桜の花が散り始め、春の美しい終わりが告げられます。

「ひさかたの天（あま）ぎる雪」には、古今集334冬の「梅の花それとも見えず久方の天霧（あまぎ）る雪になべて降れば」（梅の花に空に霧がかかったように雪が降ってきて、雪と花の区別がつかなくなってしまう）が本歌でしょう。これは雪月花の美しい組み合わせの雪と花を意識させるものですが、さらに、万葉集の2344「梅

の花それとも見えず降る雪のいちしろけぬな間使(まづか)ひやらば」(梅の花が見分けのつかぬほど降る雪のようにしきりに、恋人の所へ使いをやれば)と2345「天霧(あまぎ)らひ降り来る雪の消(け)なめども 君に逢(あ)はむとながらへ渡る」(空が曇って降ってくる雪が消えてしまっても、私はあなたにいつまでも逢いたくて長く生きています)という隣り合った相聞の恋の歌とも関わっているようです。良寛さんが雪と見誤るばかりに激しく降る桜の花に、恋心のような胸騒ぎを覚えるのは花の歌人西行の影響のように思われます。それと共に小さな女の子たちがたちまち成長し、恋をする妙齢の美しい女性へと変わり、貧しさと、働くために故郷を去ってゆくことを暗示しているようです。良寛さんの手まり遊びは、この少女たちのためにせめてもの故郷(ふるさと)の良い思い出にと異郷の寂しさを知っている良寛さんならではのお饞別だったのかもしれない。

「ひさかたの天」と、これまで小さな子どもたちの背丈に合わせて、下を向いていた視線がここで急に上を向くのです。視線の変化は永遠なるものから「ひさかたの天ぎる雪」のような青空の中をはかなく散って行く白い桜の花びらの雪のような姿を見せて、天気のように変わりやすいこの世の無常迅速を教えているようです。

この歌で、子どもたちが遊んでいる舞台へ白い桜の幕が降り、手まりも子どもたちの姿も消えてしまいます。歌集の編集は、季節の場面を変え、再び大人の世界へ戻ります。子どもは時間の推移をあまり感じませんが、大人になると時を感じざるをえないからです。^{xii}

この歌集の紹介した部分は、構成や表現はずいぶん異なりますが、真理を牛に譬え、牛を探し、牛を追いかけることを仏道を求めることに牛の発見を禅の悟として、その過程を旅に、そして故郷へ帰り、自然を歌い、子どもたちと遊ぶことを遊戯三昧に譬える『十牛図』の境地の説明に通じる求道者(沙門)としての良寛さんがいるように思われます。

参考文献

拙著 『良寛』笠間書院 2011年6月25日
 拙著 『良寛の詩を読む』国書刊行会 1997年2月24日
 拙論 『良寛の歌と詩における子どもと遊びについて』本紀要48号 2009年
 拙論 『良寛と道元』武村鏡村篇『良寛のすべて』人物往来社1995年

- i 『良寛』笠間書院(以下同書より) p103 「良寛」ではなく、「良寛さん」と親しく呼ぶのは、その方が彼の真実に近づくからです。
- ii 『良寛』 p3
- iii 『良寛』 p9
- iv 『良寛』 p10
- v 『良寛』 p17
- vi 『良寛』 p26 漢詩の起承転結の構成からは承にあたります。起に当たる歌は省略しました。
- vii 『良寛』 p30 これは構成からは転にあたります。
- viii 『良寛』 p32 これは結となり、歌の連なりが区切れます。
- ix 『良寛』 p35
- x 『良寛』 p37
- xi 『良寛』 p39
- xii 『良寛』 p40 子どもの歌が非常に有名なのに、ここには三首しかありません。それははかない命の表現なのかもしれません。